

第35回北とぴあ若手落語家競演会 大賞受賞！ 笑福亭希光さん インタビュー

2024年8月25日（日）北とぴあつつじホールにて、「第35回北とぴあ若手落語家競演会」が開催されました。出演された六名がそれぞれに個性的な高座を披露。観客投票の結果、笑福亭希光さんが北とぴあ大賞に選ばれました。

まずは、北とぴあ大賞を受賞された率直な感想をお聞かせください。

ホッとしています。二ツ目時代に一回だけチャレンジできるというのは、ほかの選手権にはあまりないと思います。僕達若手の中でも、名の知れた大会だから、「（あの人）北とぴあ取ったんや！」と話題になることがあります。一度しかないって大変だなと思います。それ故の緊張感は結構大きくて、終わった直後は解放された気分でした。

——他の会とは異なる緊張感があったのですね。

チャンス1というのは、人生においても中々ないですからね（笑）

受験でしたら浪人という選択肢もありますが、一度きりというのはかなりのプレッシャーがありました。



▲受賞直後の笑福亭希光さん

今後はどのような落語を披露していきたいですか。

僕の場合はシンプルです。上手な噺家さんや確固たるスタイルをお持ちの噺家さんもたくさんいます。僕はその日の流れを大事に目の前のお客さんに「笑顔で楽しく」過ごしていただくことを一番にしたいと思ってます。

今後の展望をお聞かせください。

（落語は）少数の業界だが伝統もある、不思議な世界だと思います。バールに包まれていて、落語を知らない人も多い。落語の存在、座布団の上で何かするという事は知っていても、噺の内容に関して詳しい方はまだまだ少ない印象です。

1人でも多くの人に聞いてもらいたい。そして、「落語って面白い！」と見つけてもらいたい。出会ってもらうために活動していきたいです。

希光さんご自身が「落語って面白い！」と思った瞬間はどんな時でしたか。

もともと、吉本新喜劇で芸人をやっていました。新喜劇やお芝居は一つの役柄を表現しますが、落語は個人で多くの人々を表現します。この点に魅力を感じました。一つの舞台上で色々な人々の「気持ち」を想像して表現するのは、落語は特殊な芸能の一つだと思います。また、劇は役をいただいて表現をしますが、落語は自分で噺を選びます。与えられるのではなく、自分で選択し自分で表現を完結させる、とても裁量の多い表現だと思います。

本日の楽屋はどのような雰囲気でしたか？

とても良い雰囲気でした。ほぼみんな同期の様な感じで、協会が違っててもよく顔を合わせてきたメンバーでした。楽しく和気藹々すぎてビックリしました（笑）

最後に、一言お願いします。

歴史のある競演会で大賞をいただき、大変ありがたい気持ちでいっぱいです。共に出場した芸歴の近い落語家仲間たちは、みな異なるスタイルで臨んでいて、彼ら彼女らと一緒に今日の落語会を盛り上げようという気持ちで臨みました。そうした環境だったこともあり、傾向等を意識せず、自分の落語を意識することが出来ました。



▲演目『紀州』を披露する笑福亭希光さん。高い集中力とユーモラスな表情で、観客を笑いの渦に巻き込んでいく。

第35回北とぴあ若手落語家競演会 2024年8月25日（日）14時開演

【出演】柳亭市童、林家あんに、春風一刀、古今亭今いち、桂伸べえ、笑福亭希光（口演順）

【ゲスト】林家彦いち 【司会】米粒写経